

A commentary on the Jing-hong-ji (驚鴻記) (1)

呉, 世美

竹村, 則行

<https://doi.org/10.15017/2332564>

出版情報 : 文學研究. 90, pp.1-17, 1993-03-25. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



校注驚鴻記(一)

(明) 吳世美 著
(日) 竹村則行 校注

はじめに

- 一 楊貴妃故事を集大成させた清・洪昇の名曲『長生殿』の構想や表現に大きな影響を与えたと思われる明・呉世美の『驚鴻記』に就いては、これまで僅かに『古本戯曲叢刊』二集に影印資料が公表されたのみで、正面から研究の眼が向けられた事は無かった。本稿では、研究の基礎資料を提供する為に、その一部翻刻を試みることにする。
- 二 本稿は、明・呉世美『驚鴻記』中の「叙驚鴻」・「驚鴻記叙」、および第一齣本傳提綱、第二齣梅亭私誓、第七齣花萼驚鴻、第三十六齣入觀遇梅、第三十九齣幽明大會の各齣について校合し、簡単な注を施したものである。その他の齣の校注については、順次続刊を俟ちたい。
- 三 底本は、明・萬曆十八年序刊『新刻驚鴻記』（神田喜一郎博士舊蔵、大谷大学蔵、新刻本と略称する）を用い、明・世徳堂刊『新鐫重訂出像附釋標註驚鴻記題評』（北京大学蔵、古本戯曲叢刊二集影印、標註本と略称する）とあわせて校合する。
- 四 標註本には、陳氏尺蠖齋（不詳）の手になる頭註を附載するが、本校注では「陳氏標註」として、つとめて採録した。
- 五 俗字や異体字、また写本特有のくずし字は、原則として旧字体の正字に復する。ただし來・觀・從・為・即など、底本のまゝを襲ったものもある。
- 六 神田喜一郎博士舊蔵本（新刻本）、古本戯曲叢刊所収本（標註本）の複写にあたって、大谷大学図書館、京都大学人文科学研究所の御理解と御協力を得た。記して感謝する。
- 七 底本の刊行以来四〇〇年、『驚鴻記』の校注翻刻を試みるものは、本稿以前には聞かない。難字・句点・注釈等々、校注者の

浅学に因る許多の粗漏を免れ得ないであろうが、諸賢の御指正を賜りたい。

叙驚鴻⁽¹⁾

『驚鴻記』者、余友人仲子⁽²⁾所為、睥睨滑稽為東方⁽³⁾既世之語、以寄其牢騷不平之氣者也。仲子雅負才目無人士、尤善建安而下諸詞賦。一日為制科⁽⁴⁾所縛、悒悒謂余曰、「滄浪之歌⁽⁵⁾、萍實之語⁽⁶⁾、亦足會致丈夫屈首受書、豈必鉅釘字句、拘々博士家言哉？」蓋扼腕月餘、而『驚鴻』遂成。

嗟乎！昔宋廣平⁽⁷⁾為「梅花賦」、投繡衣直指使者、而名大振、遠近嘖々稱聞人。以廣平之器、困于窮、阨于躓、亦有是賦、何惑仲生哉、何惑仲生哉！

雖然、亦知陳子昂⁽⁸⁾之市琴乎？客有賣胡琴者、宜百萬。豪貴傳視莫辨。子昂顧左右、出千緡市之。衆驚問、答曰、「余善此」。曰、「可得聞乎？」曰、「明日可集宣揚里」。如期偕往、則酒肴畢具陳、置琴牀前。食畢、捧琴而碎之。因為文百軸遍贈會者、曰、「賤工之役、豈宜留意哉？」自是聲華溢都內。

今生即善劇、余願生為胡琴之碎也已矣。

萬曆庚寅七月七日、沈肇元元瀛父書于清音館⁽¹⁰⁾

注

(1) 『古本戲曲叢刊』二集所收本(標註本)にはこの叙を収めない。(2) この叙に述べる「仲子」「仲生」、及び次の「驚鴻記叙」に述べる「仲氏」は、その内容から推して、いずれも呉世美自身を指すと見られる。(3) 滑稽を善くした東方朔をいう。『史記』卷一二六、『漢書』卷六五。(4) 科挙試のこと。この叙が書かれた萬曆十八年直前の科挙として、萬曆十七(一五八九)年己丑科がある。(5) 屈原撰。「漁父歌」とも。『文選』卷三三所収。(6) うきうき。こうほね。『孔子家語』卷二致思參照。(7) 唐・宋璟字は廣平。宋・計有功『唐詩紀事』卷十四、宋璟に「劉禹錫、獻權舍人書曰、昔宋廣平之沈下僚也、蘇公味道時為繡衣直指使者、

廣平投以梅花賦、蘇盛稱之。自是方列於聞人之目、名遂振。嗚呼。以廣平之才、未爲是賦、則蘇公果暇知其人耶。將廣平困於窮、阨於蹟、然後爲是文耶。」と。(8) 同じく『唐詩紀事』卷八、陳子昂に「獨異記載、子昂初入京、不爲人知。有賣胡琴者、價百萬、豪貴傳視、無辨者。子昂突出、謂左右曰、斃千緡市之。衆驚問、答曰、余善此樂。皆曰、可得聞乎。曰、明日可集宣揚里。如期偕往、則酒肴畢具、置胡琴於前。食畢、捧琴語曰、蜀人陳子昂有文百軸、馳走京轂、碌碌塵土、不爲人知。此樂賤工之役、豈宜留心。舉而碎之、以其文軸遍贈會者。一日之内、聲華溢郡。」と。されば、ここに述べられる宋廣平と陳子昂の故事は、いづれも『唐詩紀事』そのままの敷き写しである。(9) 萬曆十八(一五九〇)年。なお、次の「驚鴻記叙」も七月七日の日付を持つが、七月七日は玄宗と楊貴妃の七夕密誓の記念日である。白居易「長恨歌」に「七月七日長生殿」と。『驚鴻記』第二十三齣七夕私盟を参照。(10) 不詳。

驚鴻記叙⁽¹⁾

夫博異之士、附鮑蕭而景光、妖妍之姝、登晉楚而傳譽。故蘭風椒馨、潛山隱林、冲寂自芳、蒿蔚同腐。迨陳井幹之臺、塗昭陽之壁、合歡・常寧・披香・發越、次乎寶樹、拂彼玄墀、龍步天子、而鳳儀后母。物有幸不幸、時有來不來。子虛・上林之辭、傾城傾國之笑、武皇帝同時而嘆不遇、遇而華曜並夫天施。不者與物異化、隨時回泯、曷足怪哉？若夫夷光⁽⁷⁾皎而吳宮墟、毛嬙⁽⁸⁾爛而越國滅、妲己⁽⁹⁾艶而商祚亡、飛燕⁽¹⁰⁾翔而漢成妖、斯殊色者國家之蠹、敗亡之緒。由余之卻戎嬪、高頰⁽¹¹⁾之斬麗華⁽¹²⁾、志有預戒、夫豈徒然？

又若孟弋期乎桑中、總角乘乎墮垣、靜女俟乎城隅、舜英鳴乎佩玉、褰裳涉湊、乘蘭觀滄、清揚頓蔓草之野、續紛遊東門之池、悉列詩歌、以彰淫佚、時人至比之蝮螭、醜其挑撻、斯乃一人之敗節、天下未蒙其禍。

夫禍莫大於楊氏之覆唐矣。姊妹擅國、兄弟列侯、金屋玉樓、專嬌侍夜。蓋至七夕之盟、而天下生靈、真不足棄、斯所為當其心者可知也。

及考外傳所載、則楊妃妖美、未若江氏。明皇得江、而視嬪妃四萬人如塵土。驚鴻之舞、江身不勝風、幾致冲舉、殆

飛燕・合德之流。而帝之戲楊曰、「爾則任吹多少？」蓋妃豐於肌態、霓裳羽衣、豈遂掩前古哉！⁽²⁵⁾ 史稱楊善巧便佞、先意希旨、非徒尤艷、兼有智計。⁽²⁶⁾ 江氏殆特色矜才、又天性柔雅、明皇耄而謬取舍乎。或者天欲禍唐、妖亂之至、迷心失魄、喪智眩目、無可解脫、遂成孽冤。漁陽之變、罪首歸楊、而采蘋不與。千秋萬祀、咏白郎長恨歌、歎頌楊美、江則蔑如也。余謂、江氏以絕代之姿、遭極淫之主、而無悞國之罪、守正俟死、元始以來、女伴所希矣。

余兄仲氏、適覽及之、輒慨慷涕洟、百憤俱集、心不可止、度為新聲。授之慧伶、御於綺筵、使夫清時蓋臣知禍天下止一女子。而女子之姣如江氏者、不得歌詞品題、猶之隨珠⁽²⁷⁾、卞玉⁽²⁸⁾、陸沈海沒、藻士冶女、殊塗一致、顯微闡幽、⁽²⁹⁾ 所以寄哀。

斯仲氏鬱々之懷、耿々之恨。大雅君子、其勿以吾兄、迺優伶儺劇之心、同類而見鄙哉。

七月七夕、叔華周鄭王叙。⁽³¹⁾

注

- (1) この序も『古本戲曲叢刊』二集所収本(標註本)には収めない。(2) 漢の武帝の築いた樓の名。班固「西都賦」(「文選」卷二)に「舉井幹而未半」と。(3) 漢の成帝の築いた宮殿の名。同じく班固「西都賦」に「昭陽特盛、隆乎孝成」と。(4) 漢の後宮の名。同じく班固「西都賦」に「後宮則有掖庭椒房、后妃之室。合歡・增城・安處・常寧・茝若・椒風・披香・發越・蘭林・蕙草・鴛鴦・飛翔之列」と。(5) 漢・司馬相如「子虛賦」「上林賦」(「文選」卷七・八所収)。(6) 「漢書」卷九七上、孝武李夫人伝に「歌曰、……寧不知傾城與傾國、佳人難再得。上嘆息曰、善、世豈有此人乎」と。(7) 越の美女西施の別名。(8) 西施と並稱される越の美女の名。(9) 殷の紂王の妃の名。(10) 漢の成帝の妃の名。(11) 春秋・戎人。もと晉の人。秦の繆公に降った。『史記』卷五、一一〇。(12) 隋の人。晉王は陳の亡妃張麗華を納れようとしたが、高頴は之を斬ることを主張した。『隋書』卷四一、『北史』卷七一。(13) 陳の亡妃張麗華。前注(12) 参照。(14) 『詩經』鄘風、桑中に「美孟弋矣、期我乎桑中」と。(15) 『詩經』齊風、甫田に「總角卯兮」と。また『詩經』衛風、氓に「乘彼坵垣」と。(16) 『詩經』邶風、靜女に「靜女其姝、俟我於城隅」と。(17) 『詩經』鄭風、有女同車に「有女同行、顏如舜英。將翱將翔、佩玉將將」と。(18) 『詩經』鄭風、褰裳に「褰裳涉溱」

と。(19)「詩經」鄭風、溱洧に「方秉畀兮」と。(20)「詩經」鄭風、野有蔓草に「野有蔓草、……有美一人、清揚婉兮」と。
(21)「詩經」陳風、東門之池に「東門之池」と。(22)「詩經」鄭風、蠨蛸に「蠨蛸在東」と。(23)「詩經」鄭風、子衿に「挑兮達兮」と。(24)白居易「長恨歌」に「春從春遊夜專夜……金屋粧成嬌侍夜、姊妹弟兄皆列土……七月七日長生殿」と。(25)宋・樂史「太真外傳」卷上に「上又曰、爾則任吹多少、蓋妃微有肌也……妃曰、霓裳羽衣一曲、可掩前古」と。(26)陳鴻「長恨歌伝」に「非徒殊艷尤熊致是、蓋才智明慧、善巧便俊、先意希旨、有不可形容者」と。(27)隋侯に命を助けられた大蛇が恩返しに奉じた玉。ここでは梅妃に喩える。故事は「戦国策」「淮南子」などに散見し、明・張鼎思「琅瑯代醉編」卷三八にまとめる。(28)楚の卞和が玉に献じた宝玉。何度も詐りとされて処刑されたが、文王に至ってはじめて宝玉であると認められた。「韓非子」和氏。ここでは梅妃に喩える。(29)「易」繫辭伝下に「天下同歸而殊塗、一致而百慮」と。(30)同じく「易」繫辭伝下に「顯微而闡幽」と。(31)叔華は呉世美の字。「周鄭王」は「百家姓」に「周呉鄭王」とあることから呉姓を隠す。従ってこの叙文は呉世美の自序である。黄文暘「曲海総目提要」卷十一「驚鴻記」提要参照。

新刻驚鴻記⁽¹⁾ 卷之上

多口洞天人編⁽²⁾

第一齣 本傳提綱

〔清平樂〕(末上白)⁽³⁾ 翠鬢金縷。春暖梨花雨。⁽⁴⁾ 多少英雄迷此際。悞國殃民任取。娉婷十五紅兒。⁽⁵⁾ 粧成金屋嬌姿。⁽⁶⁾ 不遇文人才子。沉埋黄土誰知。

(間内了)⁽⁷⁾ 借問後房子弟、今日般演誰家故事、那本傳奇?⁽⁸⁾ (内應了)⁽⁹⁾ 今日般演一本驚鴻記。⁽¹⁰⁾ (末) 原来此本傳奇、待小子略道家門、便見戲文大意。

〔漢宮春〕天寶明皇。得嬌妃江氏。寵冠明光。⁽¹¹⁾ 每向梅亭賦賞。⁽¹²⁾ 賜號稱揚。詩歌詞賦。驚一班李杜岑王。從古道紅顏薄命。奸邪造計中傷。召入楊妃壽邸。⁽¹³⁾ 霎時間拋撇。迷戀霓裳。⁽¹⁴⁾ 因此喧天震地。鼙鼓漁陽。⁽¹⁵⁾ 馬嵬難起。待歸來依舊鸞凰。

看往代荒淫敗亂。今朝垂戒詞場。⁽¹⁶⁾

唐天子嬖寵宮闈忘社稷

江采蘋幽閑終始保君恩

楊貴妃一曲霓裳驅萬乘

李太白文章聲價值千金

注

(1) 【古本戲曲叢刊】二集所收明世德堂刊本は「新鍔重訂出像附釋標註驚鴻記題評」と題する(以下標註本と略称する)。(2) 「口天」吳、即ち吳字を指す。標註本は「秣陵陳氏尺蠖齋註釋」「繡谷唐氏世德堂校梓」と分行して署す。秣陵は南京の古名。世德堂は明の方曆期、金陵(南京)の著名な書肆。(3) 標註本は「開場」に作る。(4) 白居易「長恨歌」に「梨花一枝春帶雨」と。(5) 晚唐の官妓杜紅兒をいう。羅虬「比紅兒詩」一百首(「全唐詩」卷六六六)参照。陳氏標註に「紅兒歌兒也。樂書云、優童解紅舞、衣紫緋繡襦、銀帶花風冠。升庵【詞品】引之云、蓋五代時人也」と。明・楊慎【詞品】卷二参照。(6) 白居易「長恨歌」に「金屋粧成嬌侍夜」と。(7) 標註本は「科」に作る。(8) 底本は「問」字に作る。今標註本によって改める。(9) 標註本は「云」に作る。(10) 標註本は「云」字を加う。(11) 陳氏標註に「明光、殿名」と。明光殿は漢の武帝が建てた宮殿の名。(12) 宋・無名氏「梅妃伝」に「上榜曰梅亭、梅開賦賞」と。(13) 陳氏標註に「楊妃故為寿王妃、故曰召入楊妃壽邸。言壽邸之楊妃也」と。(14) 陳氏標註に「霓裳羽衣、舞曲名」と。(15) 白居易「長恨歌」に「漁陽鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲」と。(16) 陳氏標註に「此傳之速、此末一旬見之。噫、思遠矣、詞微矣。□士也夫、詩人也夫。」と。陳鴻「長恨歌伝」にも、「意者不但感其事、亦欲懲尤物、窒亂階、垂於將來者也」とある。

第二齣 梅亭私誓

〔滿江紅〕(旦扮梅妃、貼・小旦扮二宮女上。旦唱)澹飾明姿。步無塵。⁽²⁾玉釵翠鈿。長安內寒稍清氣。又驚時變。忍盡嬌心和月冷。幾回腸斷花如面。⁽³⁾(貼・小旦唱)六宮粉黛搃三千。⁽⁴⁾空勞倦。⁽⁵⁾

〔西江月〕(旦)傾國傾城一笑。為雲為雨千腸。⁽⁶⁾花間起舞散幽香。從此驚鴻獨賞。謝女休誇好句。班姬正倚新粧。⁽⁸⁾數奇不願侶毛嬙。⁽⁹⁾誰向長門悒悒快。⁽¹⁰⁾

妾身姓江、名采蘋、莆田人氏。九歲遍觀書史。及笄、選侍掖庭、荷蒙君皇、大見寵幸。自得妾身之後、嬪妃四萬人、視如塵土。性最喜梅、所居闌檻、悉植數株、梅開賦賞、至夜分、尚願戀花下不能去。上以妾所好、戲名梅妃。今夜風清日明、依花洞戶、遠遠聞御道呼聲。想是聖駕來也。不免出迎則個。(生扮唐明皇、末·外淨·丑扮四黃門上)

〔一枝花〕(生唱) 綺窓疎影轉。雕鞏幽香滿。晚來光似畫。怎消遣。女伴遙瞻。那得宸遊遍。(末·外淨·丑唱) 忽聽響來

金釧。(貼·小旦同旦俯伏) 〔旦〕 賤妾梅妃、接駕賞梅。(生) 妃子起來。朕與卿回到梅亭玩賞。願梅月雙清。年年歲歲。早開春宴。

〔柳稍青〕(生) 皓魄初盈。輕寒似水。飛影如鱗。一陣東風吹撲。依微千片隨人。(旦) 仙娥花月精神。奏鳳管鸞絲鬪新。

萬歲聲中。九霞杯裏。長醉青春。(生) 朕數日為朝政所困。今見此花、不覺襟懷開也。

〔桂枝香〕(生唱) 何來幽媛。清芬拂面。那堪玉宇涼生。又揭出廣寒絲管。縱佳人世外。佳人世外。争似我淡粧飛燕。⁽¹⁸⁾

(旦對生) 只恐落梅殘月。他時冷落淒其。(生) 朕倘有此心呵。蒼天如鑑。鑑此分中緣。(生携旦唱) 尔出入君懷袖。休提團扇篇。⁽²¹⁾

〔前腔〕(旦唱) 韶華如電。星霜幾換。記往時凝睇咲疎花。今又見橫斜深院。恨無情燕子。無情燕子。向何處風流未轉。

燕來花斷。搃是畏春寒。輸却南來鴈。年年短笛前。

(生) 妃子近日為蕭蘭梨園七賦。⁽²³⁾ 諸翰林學士人人嘆服。今試更賦梅花、限汝兩日之內。朕欲頒示翰林。(旦俯伏) 賤妾檐閣軟質、安望藝苑鴻材。既辱鈞言、謹當獻醜。

(生) 素嬪每趣回輦後

(旦) 飛花亂落舞觴前

(衆) 宸遊對此歛無極

嬪色花容搃可憐

注

(1) 標註本は「上」唱の二字を欠く。(2) 陳氏標註に「步無塵、此即從奢塵脫來」と。(3) 陳氏標註に「花如面、此蓮花似、亦即脫來得其意、忘其言也。此詞家使事、使意上乘」と。白居易「長恨歌」に「芙蓉如面柳如眉」と。(4) 標註本は「唱」字

を欠く。(5) 白居易「長恨歌」に「六宮粉黛無顏色」「三千寵愛在一身」と。(6) 陳氏標註に「漢書、一顧傾人城、再顧傾人國。高唐賦、朝為行雲、暮為行雨」と。「漢書」は卷九七李夫人伝、宋玉「高唐賦」は「文選」卷十九參照。(7) 陳氏標註に「謝女太傅女道韞」と。晉・謝太傅安の從女謝道韞のこと。「晉書」卷九六參照。(8) 陳氏標註に「班姬、彪女班婕妤」と。班固の妹班昭のこと。「後漢書」卷八四。李白「清平調詞」其二に「可憐飛燕倚新粧」と。(9) 陳氏標註に「毛女、玉姜嬙。王嬙、即昭君」と。漢・劉向「列仙伝」參照。(10) 陳氏標註に「漢武陳皇后、失寵居長門宮」と。(11) 宋・無名氏「梅妃伝」に「梅妃、姓江氏、莆田人。……妃年九歲、能誦二南、妃笄矣。見其少麗、選歸、待明皇、大見寵幸。長安大内大明興慶三宮、東都大内上陽兩宮、幾四萬人、自得妃視如塵土。……性喜梅、所居闌檻、悉植數株、上榜曰梅亭。梅開賦賞、至夜分尚顧變花下不能去。上以其所好、戲名曰梅妃。」と。(魯迅「唐宋傳奇集」による)。然らば、「鶯鶯記」中の梅妃故事は、この通行本「梅妃伝」に拠つた事が明らかである。(梅妃伝)は「說郛」「五朝小説」「顧氏文房小説」等、元・明の叢書中に輯録される。呉世美は恐らくこれらの中のいずれかの「梅妃伝」を手本にしたものと思われる。(12) 標註本は「唱」字を欠く。(13) 標註本は「唱」字を欠く。(14) 底本は「俯伏」に作る。今標註本によつて改める。(15) 底本は「期」に作る。今標註本によつて改める。(16) 標註本は「唱」字を欠く。(17) 陳氏標註に「廣寒、明皇嘗夢入月宮、至一所、見素女舞桂樹下。寒不可禁。顧殿宇崢嶸榜曰、廣寒清虛之府。」と。故事は唐・柳宗元(?)「龍城録」に見える。(18) 陳氏標註に「飛燕、趙成帝妃、身輕能掌上舞」と。「漢書」卷九七、及び「飛燕外伝」參照。(19) 標註本は「對生」の二字を欠く。(20) 標註本は「唱」字を欠く。(21) 陳氏標註に「團扇篇、即班婕妤所製。怨歌行曰、新製齊紈素、鮮潔如霜雪。裁成合歡扇、團々似明月。出入君懷袖、動搖微風發。常恐秋節至、涼颺奪炎熱、棄捐篋笥中、恩情中道絶。」と。班婕妤の「怨歌行」は「文選」卷二七、「玉臺新詠」卷一所収。(22) 標註本は「唱」字を欠く。(23) 宋・無名氏「梅妃伝」に「妃有蕭蘭・梨園・梅花・鳳笛・玻盃・剪刀・綺窗七賦」と。(24) 標註本は「俯伏」二字を欠く。

第七齣 花萼驚鴻

(小丑扮高力士上)「帝里藩城星漢通、炊金饌玉待鳴鐘。曉開綺張三千戶、暮入青樓十二重。」自家大唐内監高力士是也。昨領聖旨、傳示光祿司安排筵宴。萬歲爺與親王妃子、同登花萼樓玩賞。不免在此伺候、率小侍們洒掃整理一番。道尤未了、聖駕已到。
(生扮唐明皇、衆扮黃門上)

(傳言玉女)(生唱)日暖風恬。正是塵寰瑤島。春情人夢。絳闕仙音繞。(外扮宋王、末扮申王、小生扮岐王、小淨扮漢王上。唱)奉詔登樓。須信道壺篔兄弟。魚水君臣。(5)從來絶少。

(生) 寡人即位以來、且喜年歲豐稜、士民樂利、朝廷無事。日從燕間、與兄弟輩選妓徵歌、飛花飲酒。非圖荒樂、用篤彝倫。
(外末·小生·小淨) 願吾皇萬歲。(生) 皇兄皇弟同之。朕於音律頗精。近選俊慧樂工三百人、禁廷妃子妓女三千人、親自教訓、悉號為梨園弟子。今令演習。皇兄皇弟試看者。宣衆樂工上。(衆樂奏了)(外) 臣聽衆樂、清音緩節、窮工極妍、非聖天子建中和之極、兼摛條貫、何以臻此、第不審吹笛者何來、似從天上、非出人間。(生) 這是朕妃子江采蘋所吹。高力士、可宣梅妃上來。(小丑) 領旨。梅娘娘有宣。(旦扮梅妃上。唱)

〔海棠春〕 妙舞與仙韶。占斷人間耀。

梅妃叩見。願吾皇萬歲。(生) 妃子到來。朕常稱妃子乃梅精也。吹白玉笛、作鷺鴻舞、一座光輝。今日朕宴諸王、你且舞一回、待諸王飲一盃。(旦) 謹領旨。

〔對玉環帶過清江引〕(旦舞唱) 弱體徘徊。珠簾捲落暉。蟬鬢欲偃。裙拖六幅開。夜月扇欹回、雲衣作舞裁。一點春心。洞房深似海、遠鴻千里憑誰在。聲破銀牀睡。斜飛落掌中。清影侵天外。却便是語依花。動隨風。嬌軟態。

(外末·小生) 清歌妙舞、果然一坐生輝。(小淨) 妙妙妙、妙得極。何須漢宮飛燕、那數與國西施。不要說他別樣、只是歌舞之時、裙褶飄開、他一寸金蓮、向空軒舉。這儘勾得吾皇銷魂了。(生) 皇弟休得取笑。且斟酒來。(生送外末·小生·小淨酒。衆跪受了。)

〔錦堂月〕(生唱) 日映金樽。雲迴玉殿。三條九衢連轉。千里河山。盡歸此處芳筵。京華裏。遊俠雕鞍。綺羅中。幽閑嬌面。(合唱) 珠簾捲。看取歌咏斯干。樂酒惟宴。

(外末·小生·小淨進酒了。唱)

〔前腔〕 沉廂。漢武汾遊。周文鎬燕。登依小臣非淺。劍履南宮。簪纓北闕。交歡。光映處。繡柱璇題。坐擁着。寶釵金釧。(合唱) 齊稱願。看取舜日堯年。永沐恩眷。

(生) 昨見禁苑有橙樹、一帶五子。此朕兄弟五人友愛所感。今摘來、朕與皇兄皇弟各取其一。妃子可為朕分之。(旦) 領鈞旨。
(將橙先上生了、分外、分末、分小生、分小淨)(小淨將腳踏旦脚、作戲了)(旦怒背語) 漢王這廝無狀。戲侮官妃、褻慢天子。(下)(生) 梅妃因何去了、快宣來。(小丑跪) 謹領旨。(下)

〔醉翁子〕(小淨唱) 私念。這場事。招殃生變。非楚庭燭滅。斷纓難辨。(生唱) 何怨。竟月避疎雲。香送金蓮委翠鈿。(合

唱) 挨沉醉。到漏盡銅壺。大被高眠。⁽³²⁾

(小丑上)⁽³³⁾ 覆爺。梅娘娘履珠脫落、心上不快、因此還宮。(生) 再宣。(小丑下)

〔前腔〕(外唱)⁽³⁴⁾ 還願。酌酒後。燕居交勸。把君王樂事。生靈溥遍。⁽³⁵⁾ (末唱) 須遣。是帝賚昇平。何必勤勞負盛年。⁽³⁶⁾ (合唱)

(同前)

〔僂僂令〕(小生唱)⁽³⁷⁾ 佳人心已倦。帝子興猶堅。漸見桂滿水輪清冉冉。皓色浸樓臺。聽夜弦。

(小丑上)⁽³⁸⁾ 覆爺、梅娘娘縫珠已完、忽患心疼、不能應召。(生) 也罷了。

〔前腔〕(合唱)⁽³⁹⁾ 興闌啼鳥喚。坐久落華顛。搥是夜飲厭厭情無已。看北斗向南山結大年。⁽⁴¹⁾

〔尾聲〕椒房窈窕承龍輦。偏將花萼敦天顯。這令德巍巍掩後先。

(生) 禁內橙開看並蒂 樓中勝會是連枝

(衆) 共歡天意同人意 萬歲千秋奉盛時

注

- (1) 標註本は「云」字を加う。(2) 唐・駱賓王「帝京篇」に「平臺戚里帶崇墉、炊金饌玉待鳴鐘。小堂綺帳三千戶、大道青樓二十重」(『全唐詩』卷七七)と。(3) 標註本は「唱」字を欠く。(4) 陳氏標註に「毛詩、伯氏吹簫、仲氏吹篪」と。『毛詩』は小雅、何人斯に見える。(5) 陳氏標註に「蜀志、孤之有孔明、如魚之有水」と。『三國志』卷三五、諸葛亮伝に見える。(6) 標註本は「衆奏樂科」に作る。(7) 標註本は「唱」字を欠く。(8) 陳氏標註に「洛神賦、翩若驚鴻、婉若遊龍」と。曹植の「洛神賦」は『文選』卷十九所収。(9) 宋・無名氏「梅妃伝」に「此梅精也、吹白玉笛、作驚鴻舞、一座光輝」と。(10) 陳氏標註に「斜飛事、此亦用飛燕掌中舞事」と。(11) 標註本は「云」字を加う。(12) 標註本は「吳越」に作る。(13) 標註本は「得」字を欠く。(14) 底本は「整」に作る。今標註本によつて改める。(15) 標註本は「外小生末」に誤る。(16) 標註本は「科」字を加う。(17) 標註本は「了」字に作る。(18) 標註本は「唱」字を欠く。(19) 唐・駱賓王「帝京篇」に「三條九陌麗城隈」と。(20) 同じく「帝京篇」に「山河千里國」と。(21) 標註本は「唱」字を欠く。(22) 標註本は「了」字を欠く。(23) 標註本は「王」に作る。(24) 唐・駱

寶王「帝京篇」に「繡柱璇題粉壁映」と。(25) 標註本は「唱」字を欠く。(26) 標註本は「將橙先上生了、後分外末小生小淨」に作る。(27) 標註本は「科」に作る。(28) 標註本は「云」に作る。(29) 標註本は「云」に作る。(30) 陳氏標註に「國策、楚王賜群臣酒。燭滅、有人引美人衣。美人援絕其冠纓、告王。王命百官俱絕纓、廼出火。後晉與楚戰、一人常在前、五合五獲。王怪問之、曰、臣乃夜絕纓者也。」と。故事は漢・劉向「說苑」卷六にも引く。(31) 標註本は「唱」字を欠く。(32) 陳氏標註に「明皇本紀、玄宗為長枕大衾、與諸王同寢」と。『旧唐書』卷九五、睿宗諸子參照。(33) 標註本は「云」字を加う。(34) 標註本は「唱」字を加う。(35) 標註本は「唱」字を欠く。(36) 標註本は「唱」字を欠く。(37) 標註本は「唱」字を欠く。(38) 標註本は「云」字を加う。(39) 標註本は「唱」字を欠く。(40) 陳氏標註に「毛詩、厭厭夜飲、不醉無歸」と。『毛詩』は小雅、南有嘉魚之什、湛露。(41) 陳氏標註に「莊子、有大年、有小年」と。『莊子』逍遙遊に「小年不及大年」と。(42) 陳氏標註に「椒房皇后之宮、以椒塗壁、故曰椒房」と。唐・駱賓王「帝京篇」に「椒房窈窕連金屋」と。(43) 陳氏標註に「花萼樓名、即明皇時造、取以怡兄弟之義」と。(44) 『詩經』小雅、蓼蕭に「宜兄宜弟、令德壽豈」と。

第三十六齣 入觀遇梅

〔粉蝶兒〕(旦扮梅妃上。唱)寂寂空門。(1)忽報清塵除道。(2)引動春情。又怕君心難料。(3)

〔如夢令〕古寺香歸何處。滿目殘花飛絮。松舍寂無人。夢斷昭陽雨露。無寐無寐。門外五更鍾起。

奴家梅妃是也。本為萋菲貝錦、(4)被遣離宮、豈期荆棘銅鈿、(5)寄身蕭寺。近聞聖駕南還、已斷霓裳之夢、意欲躬身上訴、重申翠閣之盟。只恐君心莫定、空鎖長門。未若佛力隨緣、好尋正果。早聞御坊上喧傳太皇駕、幸我玄都觀中。不知何故、只得與俺悟真師父、出山門外接駕。會面之時、我看君王認與不認、再作區處。(下)(生扮唐明皇)衆扮四黃門、兩侍衛軍隨上

〔雙勸酒〕(生唱)興慶繁華。宜春樂事。朝思暮思。悠悠何奈。(10)多情難覓艷陽姿。章臺上。(11)青條向誰。

〔如夢令〕巷柳依微千頃。兩兩黃鸝呼應。倦馬不勝情。行到禪林清冷。人靜人靜。誰遣終朝孤另。

朕自開元時、夢我祖玄元皇帝、賜以延壽之符。既得其像于京城西南、迎置玄都觀。興造殿宇、窮極高麗、朝夕奉侍、籍此國家。不想逆賊叛朕、擾亂長安、多少樓臺殿閣、俱陷兵火、惟玄都觀獨存。此豈非我祖仙力之廣乎。近日西內淒楚無聊、不免到玄都觀、重謁仙輝、更新齋會則箇。(旦·丑同上俯伏)玄都觀尼姑迎駕。(生·衆僧尼各歸廊下)(旦·丑作起)(14)(生作私語)(15)這小尼姑妖

容絕世、媚色傾城、好像梅妃一般。待朕上殿畢事、細問根由。(旦私作悲了)久違雲雨之歡、已夢想不到。忽瞻天日之表、又戰懼難言。怎生是好。(旦·丑同下)(生進禮佛了)(衆黃門共跪)請爺炷香。(生唱)

(二郎神)兵亂後。去京華。向巴江廝守。這一炷香呵、報聖祖皇天恩德厚。竟須與雷電。把鯨鯢睡手全收。(22)可憐這些將士、百萬生靈、為朕一人、肝腦塗地。這一炷香呵、願白骨沙場善地修。慰春閨。夢中情逗。(作嘆了)我李隆基身為天子、不能保全嬪妃、使死者含冤九泉、生者流移殊土。這一炷香呵、期七夕渡牽牛。問鷺鴻甚處沉浮。

(生)禮佛已畢。且往前殿聽僧尼誦經。(旦上作送茶了)玄都觀後殿尼姑奉萬歲茶。(又作俯伏了)(生)尼姑是何處人氏、何年出家？從直奉上。(旦唱)

(集賢賓)采蘋江氏當年幼。開元選入鸞儔。(生)那開元時天子、何等樣待汝？(旦唱)侍宴承歡專夕晝。植疎梅。亭院耽幽。因此、蒙唐天子賜名梅妃。(生)後其間、因何流落在此？(旦唱)為楊妃嫉構。拋閃在離宮許久。(生)兵亂之時、汝何得免於難？(旦哭唱)真自醜。沒奈何飄流原野。此地相留。

(三段子)(生唱)當初棄伊。也只為虛言亂語。歸來慘悽。那一日。無心念伊。梅妃、你要見唐天子、朕即是也。(作抱悲了)(生·旦同唱)豈圖今日重相會。猶如枯木逢春意。不枉梅亭。山盟海誓。

(旦)至尊別後、起居何似？

(歸朝歡)(生唱)傷心處。傷心處。花容燕語。(旦)那楊妃何在？(生唱)楊妃在馬嵬殺取。(旦)為何殺了他？(生唱)兵和將。兵和將。逼殘玉肌。恨從今。永不見霓裳羽衣。(旦作悲了)楊妃可憐也。君王奈何不救他。(生唱)君臣相顧空垂淚。蹣跚脚掩面愁無奈。那時節。始信脚幸未隨。

(衆作跪了)請爺爺娘娘回駕。(生·旦同作上轎了)

(雙聲子)(衆合走唱)陽臺侶。陽臺侶。定今夜重雲雨。瑤池女。瑤池女。向故苑申情妮。爭笑語。爭笑語。鴛夢起。鴛夢起。看春深翠閣。漫遺珠履。(41)

〔尾聲〕 匆匆會合真奇異。須整頓寒梅香氣。(且獨唱) 到黃昏。再不敢閑行去惹非。⁽⁴²⁾

(衆) 紫陌紅塵拂面來 薰風徐送馬啼回

(生) 玄都觀裏梅如許 恰是三郎去後栽

注

- (1) 標註本は「唱」字を欠く。(2) 陳氏標註に「清塵已見。又天子清道而後出」と。(3) 標註本は「春心」に作る。(4) 陳氏標註に「貝錦銅鈿、俱已見」と。(5) 第二十一齣翠閣好會參照。(6) 底本は「街坊」に作る。今標註本によつて改める。(7) 底本は「那」に作る。今標註本によつて改める。(8) 標註本は「唱」字を欠く。(9) 陳氏標註に「興慶池名、宜春苑名」と。(10) 白居易「長恨歌」に「聖主明朝暮暮情……悠悠生死別經年」と。(11) 陳氏標註に「韓翃寄妾柳氏詩、章臺柳、章臺柳、昔日青々今在否。縱使長條似舊垂、也應板折他人手」と。唐・許堯佐「章臺柳傳」(柳氏傳)參照。(12) 標註本は「元」字を欠く。玄宗皇帝は老子のこと。『旧唐書』卷二四參照。(13) 標註本は「云」に作る。(14) 標註本は「科」に作る。(15) 標註本は「云」に作る。(16) 底本は「只」に作る。今標註本によつて改める。(17) 標註本は「且作私悲云」に作る。(18) 陳氏標註に「語語人情」と。(19) 標註本は「云」字を加う。(20) 標註本は「爺爺」に作る。(21) 陳氏標註に「巴江蜀江名」と。(22) 陳氏標註に「左傳、取其鯨鯢、鯨鯢皆巨魚、故以喻敵」と。『左傳』は宣公十二年條。(23) 標註本は「云」に作る。(24) 標註本は「何」に作る。(25) 標註本は「生」字を欠く。(26) 標註本は「科」に作る。(27) 標註本は「唱」字を欠く。(28) 白居易「長恨歌」に「承歡侍宴無閑暇、春從春遊夜專夜」と。(29) 標註本は「唱」字を欠く。(30) 標註本は「唱」字を欠く。(31) 標註本は「科」に作る。(32) 標註本は「唱」字を欠く。(33) 標註本は「唱」字を欠く。(34) 標註本は「唱」字を欠く。(35) 標註本は「云」に作る。(36) 標註本は「唱」字を欠く。(37) 白居易「長恨歌」に「君臣相顧盡霑衣」と。(38) 標註本は「衆跪云」に作る。(39) 標註本は「科」に作る。(40) 宋玉「高唐賦」に「旦為朝雲、暮為行雨、朝朝暮暮、陽臺之下」と。(41) 第二十一齣翠閣好會參照。(42) 惹是生非、惹是招非の意。物議をかもす、悶着を起す。

第三十九齣 幽明大會

〔意難忘〕(生扮唐明皇、小丑扮高力士) (生唱) 信馬南歸。歎陰陽歲暮。短景頻催。(旦扮梅妃上唱) 驚鴻羞起舞。玉笛韻忘吹。 (小丑扮唐太子) 上。唱。離戰伐。奏平夷。乘暇侍敵幃。(末扮杜甫、小生扮李白) 上。唱。繞龍光。排開宮扇。雉尾雲移。

(小丑向生) 父王、逆賊既誅、神州恢復、正宜朝權暮樂、因其觸景傷懷？(生) 朕有幽懷、無人可語。(末·小生) 臣李白、臣杜甫、想起吾皇愁悶無已、意在玉妃。聞海上異人、往雲宮通耗、此事果否？(生) 昨見他持來金鈿鈿合、俱折其半。朕猶疑為新垣平之詐也。及檢來啓、宛然玉妃手書、其中七月七夕之言、獨朕與玉妃私誓、無一人知。因此情懷、不勝震悼。(小生) 臣聞此人得李少君之術。陛下何不召試之、效漢武帝李夫人故事乎。(生) 李供奉說得最妙。高力士可宣那鴻都客來。(小丑俯伏了) 奴婢領旨。(向內叫) 鴻都客有宣。(丑扮道人持劍作笑上) 眇王公如糞土、視天子若嬰兒。揮雲劍是我的印信、李少君是我的祖師。(向生作俯) 海上道人拜見大唐天子。(生) 道人請起。朕聞汝得李少君之術、可為朕召致楊妃否？(丑) 這不打緊。頃刻就來。但須在昏黃時候、燈燭交輝、簾幙下垂。天子與妃嬪、可以聞其聲、可以見其形、不可以並肩而同席也。(生) 朕若近前、與之同席何如？(丑) 略一近前、神魂即滅、往代漢武帝李夫人亦如此。(生) 悉遵玄訓。作速召來。(丑持劍作舞) 上青天、下黃泉、山在虛無縹緲間、碧衣侍女莫遲延。天子使、王妃府、東浮大海、下蓬壺、山魅江魃不得阻。吾奉太上老君勅、急急如令。(向生高叫) 楊貴妃到。(貼道服手持青綉、扮楊貴妃上)

〔北新水令〕(貼唱) 却離仙府降塵闌。嘆分鸞、暫時完聚。恨昭陽恩愛稀。(生對旦) 這是楊妃來也。(旦作遠望) 果然是他。(貼作悲對生俯伏了) 楊妃蒙召、叩見吾皇。(生) 玉妃請起。(貼作起了、對旦) 梅夫人請了。(旦) 玉妃請了。玉妃今從何處來？(貼唱) 感君王至誠意。兩遣上紫泥。俺在九華帳裏驚起。

(生作悲了) 朕悼妃子、何日無之。

〔南步步嬌〕環珮聲來月下。笑貌依然是。芳心亂又迷。待欲相親。恐伊藏匿。(旦) 玉妃、你可近前、與君王執手叙懷否？(貼) 幽明路隔、奴家不得前也。(旦唱) 你不似入宮時。每爭先投向君懷內。

〔北折桂令〕(貼唱) 早知別離水相憶。誰待要生時妬取。(旦) 奴家亦思見玉妃、恨不即死。(貼唱) 願伊。休如俺羅下殘屍。紫綉裹。馬嵬埋瘞。(生) 那馬嵬之事、真終天之恨、是朕薄倖也。(貼唱) 端的是妾悞你霓裳羽衣。太痴迷。雲雨朝夕。樂極

悲至。那賊奴弄兵戈。因此上。攻擊了楊氏門楣。

〔南江兒水〕⁽³³⁾（生唱）聽說罷當年事。教人倍悽悽。自汝馬嵬別後，朕好不難為情也。春風桃李花開謝。⁽³⁴⁾ 秋雲菡萏空江渚。遲遲鍾漏難成寐。⁽³⁵⁾（旦唱）景物年年猶在。奈生死悲歎移徙。

〔北鴈兒落〕⁽³⁶⁾（貼唱）徒想他鬧喧喧羯鼓聲。馮誰下滴滴溜溜篋篋淚。興慶池。月自移。宜春院。人何奈。西來鷺。舊墨逐行樓。似曾識趁風姿。整不起梨園韻。呼不來秦阿姨。⁽³⁷⁾（生）妃子，汝且休提往事。朕期再結後緣。七月七夕，⁽³⁸⁾可無寒盟否？

〔貼唱〕⁽³⁹⁾盟誓。俺自為長生殿上決難棄。（生）朕曾遣人到馬嵬移葬，妃子可知否？⁽⁴⁰⁾（貼唱）心知。顯得恁萬般情。戀着塵土肌。⁽⁴¹⁾（小生向貼）娘娘殿下可認得臣否？⁽⁴²⁾（貼）汝廼學士李白也。李生可記前生事乎？⁽⁴³⁾（小生）臣記不來。⁽⁴⁴⁾（貼）吾廼太一王妃，汝亦方唐仙吏。侍宴王母，墜却霞觴。坐此不敬，淪落人世。⁽⁴⁵⁾（小生作驚想）呵，果是如此。若非仙母微指迷津，遂使小臣永沉苦海。（作向貼拜謝）

〔南饒僥令〕⁽⁴⁶⁾（小生唱）這話分明咱與伊。原是舊相知。鈎弋夫人竟伴侶。指引得東方朔不終迷。⁽⁴⁷⁾ 東方朔不終迷。

〔北收江南〕⁽⁴⁸⁾（貼唱）呀。早知道這般樣行徑。誰待泣馬嵬時。李生，你快轉頭。恁便是謀王定伯待何如。驚人綺語搥休提。⁽⁴⁹⁾（小生）多謝玉妃指教。再求箇究竟兒。⁽⁵⁰⁾（貼）吾今已遣兵難，汝後亦有水厄，到此時呵，端的要沉溺。俺則索向空江明月候君歸。

（生）原來李白是箇仙吏，朕素不知。朕雖凡胎俗骨，亦望王妃憐而收之。⁽⁵¹⁾（旦）賤妾願拜事玉妃，為奉道弟子。願仙師勿棄。⁽⁵²⁾（旦獨向貼拜了）

〔南園林好〕⁽⁵³⁾（生·旦唱）向長風。慇懃禱祈。拜仙姬。多加護持。知甚日瑤池相聚。仙師呵，你歸天上。莫忘遺。你歸天上。莫忘遺。

〔北沽美酒〕⁽⁵⁴⁾（貼唱）夢莊周蝴蝶飛。⁽⁵⁵⁾ 糧未熟。到華胥。⁽⁵⁶⁾ 暑往寒來有盡期。韶華恁自知。俺已非。到底是唐天子。梅貴妃。埋着黃泥。⁽⁵⁷⁾（生·旦）全仗玉妃指引我二人。⁽⁵⁸⁾（貼）聽我道來。唐天子廼孔昇真人，梅夫人廼王母侍女許飛瓊也。⁽⁵⁹⁾（貼唱）⁽⁶⁰⁾拋下你梅亭私妮。植上你瑤池根氣。我呵。霎時間。冲舉寥廓。別伊謝伊。呵。跨晴暉。浮烟色。那時節。說甚寸腸千縷。⁽⁶¹⁾（貼走下）

〔南撲燈蛾〕（衆唱）王妃是也非。豈像鬼來媚。語罷乘風去。還似霓裳尤態也。更織妍秀異。幸聞前世好因依。嘆今生。南枝暫寄。竟鷄皮鬢髮。悔却悟來遲。

〔北尾〕（丑唱）從今後。那悲歎。索無益。莫痴心。向七夕迷離。唐天子、梅夫人、李學士、你三人可知否？若沒俺鴻都客奔馳。直墮殺你。

（搥）生不逢辰可奈何 且裁伶語任婆娑
（詩）驚鴻更是傾城舞 只少香山長恨歌

注

- （1）標註本は「唱」を欠く。（2）標註本は「唱」字を欠く。（3）標註本は「唱」字を欠く。（4）陳氏標註に「龍光、門」と。（5）陳氏標註に「又杜詩、雲移雉尾開宮扇、日遶龍鱗識聖顏」と。杜甫詩は「秋興八首」其五。（6）標註本は「云」字を加う。（7）標註本は「父皇」に作る。（8）標註本は「知之」に作る。（9）標註本は「傳雲宮耗」に作る。（10）陳鴻「長恨歌伝」に「取金釵鈿合、各析其半、……不然、恐鈿合金釵、負新垣平之詐也」と。（11）標註本は「獨朕與玉妃知、余無一人知」に作る。故事は第二十三齣七夕私盟参照。（12）陳鴻「長恨歌伝」に「此獨君王知之耳。……皇心震悼」と。（13）標註本は「放」に作る。（14）陳氏標註に「漢武故事、李夫人死、上甚思悼之。齊人李少君云、能致其神。乃夜張帳明燭陳酒食、令上居他帳中。遙見李夫人、不得就視也。上愈益想之。見漢書者、同史不載」と。「漢書」は卷九十七、李夫人伝。（15）標註本は「科」に作る。（16）標註本は「科」字を加う。（17）標註本は「黄昏」に作る。（18）標註本は「特」に誤る。（19）標註本は「科」に作る。（20）陳氏標註に「山在句、用長恨歌語」と。白居易「長恨歌」に「上窮碧落下黃泉……山在虛無縹渺間」と。（21）標註本は「楊妃」に作る。（22）標註本は「唱」字を欠く。（23）白居易「長恨歌」に「昭陽殿裏恩愛絕」と。（24）標註本は「云」字を加う。（25）標註本は「科」に作る。（26）標註本は「作起對旦云」に作る。（27）陳氏標註に「此都長恨歌語」と。白居易「長恨歌」に「能以精誠致魂魄、為感君王長轉思……聞道漢家天子使、九華帳裏夢魂驚」と。（28）標註本は「科」に作る。（29）標註本は「但」に誤り、「唱」字を欠く。（30）標註本は「唱」字を欠く。（31）陳氏標註に「此處政如轉頭」首、萬事都空、又一大悟也」と。（32）標註本は「唱」字を欠く。（33）標註本は「唱」字を欠く。（34）陳氏標註に「此即春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時兩句轉化」と。語句は白居易

「長恨歌」中の語である。(35) 標註本は「唱」字を欠く。(36) 標註本は「整頓起」に作る。(37) 陳氏標註に「秦阿姨、太真傳」と。宋・樂史「楊太真外傳」に「秦國曰、豈有大唐天子阿姨、無錢用耶？」と。(38) 陳氏標註に「長恨歌、七月七日長生殿、夜半無人私語時」と。(39) 標註本は「唱」字を欠く。(40) 標註本は「唱」字を欠く。(41) 標註本は「云」字を加う。(42) 標註本は「殿下」二字分を空格にする。(43) 標註本は「小生唱」の三字を欠く。(44) 陳氏標註に「漢書、武帝過河間、望氣者言此有奇女、天子亟使々召之。女兩手皆拳。上自披之、手即伸。由是得幸、號曰拳夫人、後居鉤弋宮、號曰鉤弋夫人」と。「漢書」は卷九十七、鉤弋趙婕妤傳。また「漢武故事」にも見える。(45) 陳氏標註に「東方朔不終迷、此又用漢武故事」と。(46) 標註本は「唱」字を欠く。(47) 宋・洪邁「容齋隨筆」卷三に「世俗多言李太白在當塗采石、因醉泛舟於江、見月影俯而取之、遂溺死」と。また元・辛文房「唐才子傳」卷二參照。また明・屠隆「採毫記」參照。(48) 標註本は「獨」に作る。(49) 標註本は「唱」字を欠く。(50) 陳氏標註に「蝴蝶用莊周夢」と。「莊子」は「齊物論」に見える。因みに、わが国金春禪竹の謡曲「楊貴妃」にも「何事も夢まぼろしの戯れや、あはれ胡蝶の舞ならん」と。(51) 陳氏標註に「糧未熟、用邯鄲華胥黃帝事」と。唐・沈既濟「枕中記」參照。(52) 宋・樂史「楊太真外傳」卷下に「吾秦上帝所命、爲元始孔昇真人」と。(53) 漢・班固(?)「漢武內伝」に見える。(54) 標註本は「貼唱」の二字を欠く。(55) 底本(新刻本)は「晴」に作る。(56) 標註本は「貼」字を欠く。(57) 標註本は「唱」字を欠く。(58) 標註本は「是」に作る。(59) 陳氏標註に「呂洞賓集、他年鶴髮鷄皮媼、今日玉顏花貌人」と。呂洞賓の詩句は「全唐詩」卷八五八、呂巖「題廣陵妓屏二首」に見える。また玄宗「傀儡吟」に「刻木牽絲作老翁、雞皮鶴髮與眞同」(「全唐詩」卷三)と。また宋・樂史「楊太真外傳」卷下參照。(60) 標註本は「北尾聲」に作る。(61) 標註本は「唱」字を欠く。(62) 白居易「長恨歌」に「臨卍道士鴻都客」と。(63) 陳氏標註に「此詩作者自嘆、蓋簡兮之歌」と。「詩經」邶風に簡兮篇があり、その序に「簡兮、刺不用賢也」とある。つまり、ここでは、賢者たる梅妃を用いなかつた白香山を諷刺すると同時に、明の当世に於て重用されなれぬ呉世美自身の慨嘆を述べたものと察せられる。してみれば、この部分の陳氏標註の趣意は、「驚鴻記」序に述べられる呉世美の發憤著書説と基本的に一致しており、「驚鴻記」に標註を施した陳氏尺蠖齋なる人物(不詳)が、作者の呉世美と甚だ近い關係にあつた事が類推される。但し、宋の無名氏の偽作になる「梅妃伝」に描かれた梅妃像は、唐の白居易の「長恨歌」中に取り入れるべくもなかつた事について、拙稿「明曲『驚鴻記』に描かれた虚像の梅妃」(明治書院・新釈漢文大系「白氏文集」六、季報)を参照。